9．高　島　炭　鉱

地　域　　西彼杵郡高島町

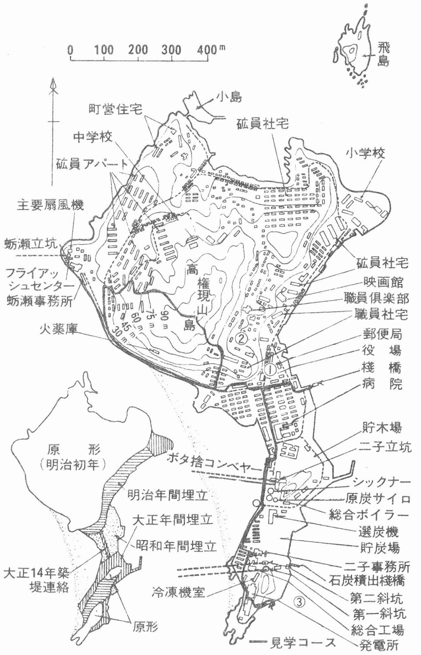
交　通　　野母商船　長崎－高島

地形図　　肥前高島・野母崎（1／50,000），
肥前高島・端島（1／25,000）

高島は長崎市の西南海上14.5kmにある面積約1km²の小島であるが宝永7年（1710年）五平太が島内で炭層露頭を発見採掘して以来，明治元年（1863年）長崎在住の英人グラバーが立坑2本を開さく（うち1本は現存している），初めて蒸気捲を使用して我国洋式炭鉱発生の地となった。明治14年三菱の経営となり，明治40年二子斜坑，昭和24年蛎瀬立坑を完成，32年に二子立坑，坑底坑道，盲立坑を骨幹とする深部開発工事に着工，40年に完成した。高島炭は灰分硫黄分が少ない高カロリーの原料用炭で，ガス・コークス・製鉄・化成用炭として古来品質には定評がある。端島，池島などと共に本邦における代表的な海底炭鉱でもある。年産 120万トン。

まず金堀アパートの裏の崖（図の①）で端島夾炭層中の石英質砂岩（いわゆる sugar sandstone ）を観察，ついでこの上位の胡麻（ごま）五尺層付近の炭層露頭（炭層の主要部は現在石垣におおわれて見られない）を見る。この露頭付近一帯は赤山と称し，人工的に焼けており，石炭はコークス状に，ボタはシャモット状を呈している箇所が多い。

蛎瀬県道ぞいに胡麻層上位の層序が右手に連続して見られるが，火薬庫を過ぎる付近から岩質が変り，灰緑色・れき質砂岩の沖の島層となる。沖ノ島層は地表で全層露出している所はないが，上部には細粒岩が多く海生貝化石を多く含み，下部には粗粒岩が多く，変成岩等のれきを含んでいる。



高　島　坑　外　図

右手はるか洋上には野母半島（長崎半島）をバックに，中ノ島，端島，三ツ瀬がながめられる。端島は面積わずか0.064 km^{2}の半人工島で月産２万５千トンの高級原料炭を産出する炭鉱で，一名軍艦島として有名である。中ノ島は香焼島に近い横島とともに明治17年に三菱が開発した所である。

蛎瀬立坑入口より右手の階段を上り，島で最も高い権現山に出る。はるか北方には右手より西彼杵半島，松島，池島，蔞島が絵のように浮び，さらに左手には江ノ島，平島もかすかに見える。高島・池島間の広大な海域は未開の原料炭々田として政府の開発調査が行なわれている区域である。眼を東に転じると，野母半島が長々と横たわり，眼下に二子立坑，選炭場，二子発電所，ボタ山などの炭鉱の事業場や社宅が見える。

権現山から降りる道の途中②に夾炭層上位にある上八尺層の露頭の一部が見られる。道路工事のさいにはもっと広く露出し，この8,000カロリーの優秀な露頭炭を失敬する人が跡を絶たなかったという。二子発電所裏の海岸③では二子島層基底のいわゆるLower *Orthaulax* Zoneに相当する化石帯がみられる。

（家坂貞男）